

発明した。それでも道具は消滅してしまつた訳ではなく、機械の補助を目的とした新たな道具もつくり出す。こうして道具は最適範囲の中で生き延び、二次的な価値であるデザインが重視された美的な存在となった。この演目には刀剣やその装飾に使う道具、香合、茶碗、花入れ、掛け軸、屏風に至るまで、美術的な価値が極めて高い「家宝」が並べられ、その目利きに優れた道具屋が登場する。現代では世界各地の道具屋が美術商を兼ねている。

●緑青（擬宝珠）

緑青は塩基性酢酸銅、塩基性炭酸銅、塩基性硝酸銅など、銅の表面に出てくる青緑色をした錆の総称である。その色から緑色の顔料として利用されている。古くから毒性が高いと言われてきた。青銅の場合は、製造する際に湯流れを良くし、製品を硬くするために微量のヒ素が使用されたが、実際にはほとんど毒性はないので、青銅の擬宝珠であっても嘗めたとしても身体に支障はない。人類の歴史に金属が登場するのは、石器時代の自然金の砂金が最初である。続いて自然銅が使われ始めるが、どちらも「自然」という文字がつくように、人工的に生成されたものではない。特に自然銅は銅鉱床の地表や路頭部分に九

十九%前後の純度の高い銅が存在している。石器時代から銅器使用に入るが、実際には石器と銅器がともに使用された金石併用時代あるいは銅石時代であった。

●二番煎じ（二番煎じ）

二番煎じは、葉や茶などで一度煎じた葉を、もう一度煎じたものをいう。転じて「新味のない二番目」あるいは「前の繰り返し」という意で使われる。あまり褒められた意味ではないが、この咄では、限りなく黒に近いグレーゾーンの会話だ。別の演目である『禁酒番屋』でも取り上げたが、社会生活には当然のことながら規則や、規則とまでは言えない暗黙の了解がある。同時にそれをかい潜るグレーゾーンも共存する。グレーは江戸時代では鼠色の「ねず」で、色の種類の多さを四十八茶百鼠（四十八種類の茶色と百種類の鼠色）と言った。黒か白かはつきりと言えない色がたくさんあった訳だ。これは言わば自動車のハンドルの遊びのように、時には必要不可欠なものである。管理者が羽目を外すことも、言葉遊びで解釈を替えることも日常生活で度々目にする。むろん政治でも。

次回予告 第 656 回

2月24日<金>も6時開場／6時30分開演

やかんなめ ● 昔 昔 亭 昇
納 豆 や ● 三 笑 亭 夢 丸
突き落とし ● 春 風 亭 一朝
三人無筆 ● 柳 家 小 せん
按摩の炬燵 ● 柳 家 喬 太郎

公演予定 3月24日<金>/4月17日<月>/5月2日<火>/6月23日<金>

□ 当世噺家気質 その239・入船亭扇橋と「いかげや」

文化文政の頃より続く大名跡の十代目、いやそれよりもほのぼのとした淡彩の芸とボケた愛嬌で親しまれた大師匠の名を継ぎ、昨年9月に真打昇進した期待の若武者だ。

当会での真打としての初の高座に選んだ「いかげや」は、自他ともに認める得意ネタであり、ここぞという時に演じてきた。それだけに逸話もいろいろ残っている。

春風亭一蔵、市弥改め柳亭小燕枝と小辰改め扇橋。仲良し修業仲間三人が一緒に披露興行だった。昨年9月21日、鈴木演芸場での大初日。披露口上には、新真打三人とそれぞれの師匠、さらに幹部までが高座いっぱいになんだ。人数が多い上に、皆、口上が長い。

この後は浮世節の立花家橘之助、続いて新真打のトップバッターとして扇橋が上がる段取りだったが、橘之助はわずか2分で高座を下りてしまった。

「時間が押しているけど、新真打にはたっぷりやらせてあげなきゃ」と言う大先輩の優しい配慮なのだが、この時、当の扇橋はまだ、口上での黒紋付から普段の高座着へ着替えの途中だったのだ。

「うわ、終わっちゃった! 舞台裏から帯を引き摺りながら高座へ走り小燕枝さんが羽織を持って追いかけてくるという塩梅で、ネタを考える余裕ありません。夢中で高座に上がり、口をついて出たのが「いかげや」でした」

扇橋は素人時代、池袋演芸場に春風亭一之輔の独演会を聴きに行った。その時のゲスト、柳家喜多八で初めて「いかげや」という噺を知り大笑いしたという。

「辰じん」を名乗った前座時代には、鈴木演芸場で太鼓番をしながら、喜多八の「いかげや」を聴いた。後ろで一之輔が「ドッカンドッカン、ウケていた」

「こんなの、笑うしかないだろ!」

稽古を願うと、喜多八は気軽に応じてくれた。落語協会の二階で、トランクスードで椅子に座り、筆ペンを扇子代わりに一席。その日の気分で演じるので、毎回言うことが違う。「うまくやろうとするな」と言うそばから「もっと、うまがれ」と煽るのである

「まぐらで昭和の遊びとか風俗をしゃべるんですが、『師匠、それ、どう考えても戦前でしょ』とツッコミたくなる。自分を年齢不詳に見せたかったのかしら。ああいうのは真似できないなあ」

最初は全くウケず、「悲しくて、しばらくやらない時期があった」と言う。それでも二ツ目の後半には自家薬籠中のものにした。

往来での子供たちと職人のやりとりだけの話なのに、面白くて楽しくて、随所に喜多八らしい工夫が生きている。

「『師匠にとっては大事なネタだったんでしょ』とお弟子さんに尋ねたら、『そうでもないんじゃないか』と言っていました」

(長井好弘)

第六百五十五回

落語研究会

日時 ● 令和五年一月二十五日<水>よる六時三〇分開演

会場 ● 国立劇場<小劇場>

主催 ● TBSテレビ

《演目》

千早ふる ● 桂竹千代

入船亭小辰改め

いかけや ● 入船亭扇橋

金明竹 ● 立川談笑

《仲入》

擬宝珠 ● 桂文治

二番煎じ ● 柳家權太樓

三味線 太田園子 笛 春風亭一花

松尾あさ子 太鼓 柳亭市童

前座 柳亭左ん坊

新・落語掌事典(二三五) 田中優子

●和歌(千早ふる)

和歌(やまとうた)は、中国の唐歌(からうた)に対する名称だ。「倭歌」とも書いた。『万葉集』の頃の日本人が唐歌に精通していたことを踏まえると、影響を受けて模倣に始まった文学が、徐々に独自の文学を築いたのである。唐歌ではないという意味から、長歌、旋頭歌、片歌などの五・七調の定型詩も総称的に和歌と呼んだ。しかし短歌以外の歌が衰退し、和歌は短歌と同じ意味で用いられるようになった。したがって和歌の呼び方は時代により推移し、今では「短歌」と言う。この咄の題名にもなっている「ちはやふる……」は小倉百人一首十七番の歌で、作者は在原業平である。業平は『伊勢物語』の主人公と考えられている。『伊勢物語』は幾度も改作・追記が繰り返され、主人公の実像と虚像が共存する。その謎めいた物語群が、江戸時代の古典復旧期に人気を博した。

●いかけ ●鑄掛(いかけや)

鑄掛は鍋や釜の欠損部(穴、割れ)に、同質の金属または半田(錫

と鉛の合金)の一種である白鐵(しろめ)を使って修理することである。それを生業としていた職人を鑄掛屋(出張業務)または鑄掛師(店舗業務)といった。どちらも鑄物師(いもじ)から分化した職業で、鍋釜の構造や弱点及び材料の性質を熟知していたからこそ、修理はお手の物だったのである。この職業が消えてしまった要因に、安価な材料(アルミニウム、アルマイト等)と機械による大量生産が挙げられよう。それは安価なるがゆえに、修理するよりも欠損したら捨てて新しいものを購入する、という「使い捨て」を庶民が選択する社会を作った。大坂に実在した鑄掛屋の夫婦をモデルに、歌舞伎の所作事が演じられ、夫婦連れで歩くことを「いかけ」と呼ぶ当時の流行語を生んだ。

●道具屋(金明竹)

道具という語は室町時代以降に使われたもので、それ以前は仏教や漢語で用いる仏具や祭具、あるいは器具という語を使った。道具は特定の目的を実現するために、媒介として用いる物的な手段として生み出された。簡単に言うと二足歩行により大脳が発達して、手の延長としての道具を生み出したのである。更に人間は、その延長上に機械を

(裏面へつづく)